

# 「三陸復興国立公園」利用者対応強化調査事業 第1回有識者会議 議事録

■日時：平成25年1月16日 13:00～15:00

■場所：宮城県行政庁舎 4階特別会議室

■出席者：

<有識者> 浅利保（みやぎ観光復興支援センター）、熊谷嘉隆（国際教養大学国際教養学部）、  
笹岡達男（（一財）休暇村協会 常務理事）、村田浩道（日本ロングトレイル協議会）、  
宮原育子（宮城大学事業構想学部）（敬称略・五十音順）

<オブザーバー> 三坂達也、清川雄司、村山寿一、関場智（宮城県環境生活部 自然保護課）  
菅原伸泰、石倉昭義（宮城県経済商工観光部 観光課）  
似田貝諭（環境省 東北地方環境事務所 国立公園・保全整備課）

<傍聴者> 仙台市、女川町

<事務局> 松井孝子、深沢久和、岩崎真希（株式会社プレック研究所）

■配付資料：

出席者名簿・座席表

資料1 「三陸復興国立公園」利用者対応強化調査事業 事業概要

資料2 本会議の論点について

資料3 今後のスケジュール

参考資料1 グリーン復興プロジェクト パンフレット

参考資料2 自然資源等情報図（自然公園、自然資源、観光施設等）

参考資料3 宮城県沿岸部の国定公園・県立自然公園の概要

参考資料4 宮城県沿岸部の観光に関する資料（利用者数、体験プログラム）

参考資料5 里山・里海フィールドミュージアムの候補地例

参考資料6 東北海岸トレイルに関する資料

■議事要旨：

本調査の概要について事務局より説明を行った上で、宮城県におけるグリーン復興プロジェクトのあり方について有識者より以下のような情報提供や提案があった。

## ①三陸復興国立公園の創設

- ・産業と保全のバランスが課題となっているアジア地域の国立公園に対して、日本の国立公園における協働型管理は発信すべき取組であり、特に三陸復興国立公園では漁業との両立という点が大きなテーマとなる。
- ・被災地というネガティブなイメージを持たれがちな地域を、国立公園としてポジティブに変換した着眼点は面白い。
- ・神社の多くが被災をしていないことや津波にまつわる伝承・昔話が役立ったという話は良いPR材料であり、復興や減災・防災に資する国立公園として国内外に積極的に発信すると良い。

- ・公園の管理・運営に地域の積極的な参画を得るためには、現場で活動している人達のネットワーク化や意見聴取を早い段階で行った方が良い。

#### ②自然や豊かな文化・食等を活かした東北ならではの観光スタイル

#### ③森・里・川・海のつながりを活かしたフィールドの保全・活用

- ・震災直後はボランティアでの来訪者が多く、現在は被災地の視察や研修等の震災関連の観光客が多い。
- ・観光協会の職員等、受入側となる人材の安定的な雇用・育成が重要な課題。
- ・地盤沈下により使用できない漁港や危険で立ち入れない景勝地があり、産業や観光に影響。
- ・大型バスが狭い道路を強引に通っている場所があり、マイクロバス等に乗り換えられるようなワンストップ機能を持った拠点施設が石巻にあると良い。
- ・民宿が再開できない中でも安定的に地元が利益を得る仕組み（高付加価値のある体験プログラムの開発、海産物の販売拠点の整備等）が必要。

#### ④東北海岸トレイル

- ・地域に合ったトレイルをどう構築するかが重要である。
- ・利用者が求めるトレイルとは、その土地オリジナルの文化・環境が溶け込んだもの。
- ・いかにその土地のことを伝えるかという意味ではガイドの育成も重要。

#### ⑤その他

- ・本事業の進め方として、ジオパークに向けた各地の動きや、貞山運河の整備検討、震災祈念公園の検討等、関連する事業と連携した方が良い。
- ・従来のインバウンド観光の対象とされる中国や韓国だけでなく、災害の被災地となったインドネシアやマレーシア等も誘致対象として有力である。
- ・現在、日本だけでなく海外からも視察・研修旅行で来訪者があるので、これを再訪に繋げるためにサインやパンフレット、WEB サイト、現地で掲示する支援に対する御礼メッセージの多言語化が必要。
- ・海外からの来訪者に対して、仙台空港又は仙台駅に最初に被災地観光の概略についての情報提供機能のある施設があると良い。
- ・陸路・空路以外に、クルーズ船での来訪者対応としてのエクスカージョンプログラムについても検討する必要がある。